

里山クラブ
You
You

雑木林

小川町里山クラブ You You

編集部発行 第2号 2004年2月20日



白光に満ちる雑木林に人ば聞く
生きものたちと樹霊のこだまを

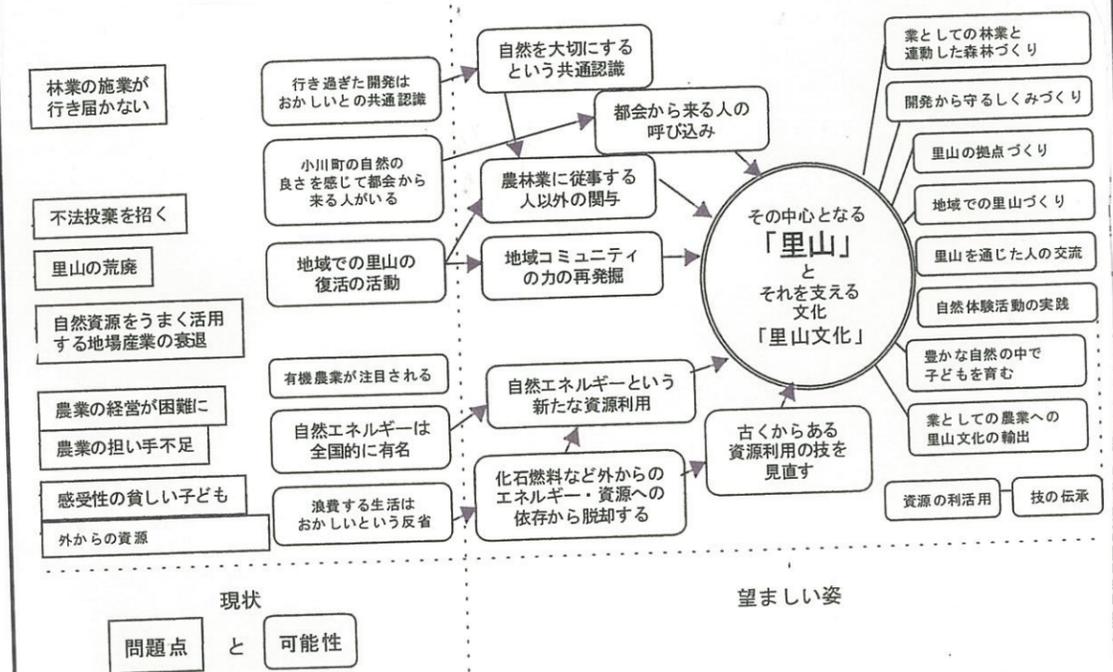
絵
R・フレビン



小川町〔環境基本計画の原則〕は
開発・経済優先から
環境優先へ

小川町里山クラブ” You-You”
会長 佐藤 章

○私たちが抱える現状の問題点



理念を語ることから行動の時

平成11年度から3カ年の歳月をかけて策定された「小川町環境基本計画」。41人の公募に応じた町民は策定協議会のもと、時には深夜に及ぶ熱い討論は100回以上。町民による「フィールドワーク」「アンケート」「地区別ワークショップ」等を重ねて、自分たちの言葉で小川町の過去と現在を語り、町の未来を開く扉をとりつけた。上記図はその扉の一つである。これは今までの開発優先から環境を優先にしたまちづくりの第一歩を踏み出したことの宣言である。これを具体的に実現するための要は、

- ①町民と行政が情報を共有すること。
- ②地域のことを主体的に考えて行動する町民と行政の協働である。そしてこれからは、語るより行動する時代だ。行動することにより私たちはは多くのことを学び、環境の21世紀への扉が開けるのである。

小川町里山クラブ” You-You” の展望

小川町環境基本計画に参加したメンバーを中心にして、小川町里山クラブ” You-You” がアクションプランの実現のために発足して2年。

私たちの活動の拠点は

- ①里山づくりゾーン [小川町町有林 小川町角山滝ノ沢 7, 2ha]
 - ② 里山体験ゾーン [小川町飯田石船谷 谷津田 20a]
- として会員30名でスタートし現在に至っている。

①里山づくり

30年来放置され荒れた町有林の下刈りから始まり。散策路の整備、植生調査、花暦作り、野鳥観察、キノコ類の調査、萌芽更新地区の設定と観察。間伐材での炭焼き、ナメコ・シイタケ等のホダ木づくりをすでに実施し、資源の利活用、伝統の技の継承等を行い町民の交流を深めている。

この交流の魅力は個人参加から夫婦、家族参加もあり、子供達の自然体験、大人と子供の触れ合いの場として機能している。さらに植生、鳥、昆虫、キノコ等の専門家の参加もすすみ、その成果は会報「雑木林」に記載され、情報発信、里山文化の発信を行いつつある。また、町でも町有林を里山作りのモデル地区として正式に指定し、町民の積極的参加を呼びかける看板を設置、公示したことは評価できる。今後は町の広報を通じてのより一層の情報提供が望まれる。

里山の整備活動の魅力は、下刈りを行うことによって、光と風が通り、昆虫、鳥、小動物が喜び、眠っていた種が数十年の眠りから覚めて、芽を出す力や萌芽更新の生命力に感動し、生命の神秘、資源循環の妙味の発見と出会いとである。生物の多様性を保全する里山整備活動は、生命エネルギーの源が何であるかを知り、人間の多様性を認めていく共生の思想にも連なる。

自分自身を癒し、自己開発にもつながり今まで気がつかなかった自分に気づくチャンネルの発見でもある。同時に自分以外の人との回路、他の生き物たちとの回路を開くステージでもある。



今後の課題は子供達の夢でもある昆虫の床づくり、ツリーハウスづくり、大人達の新しいコミュニケーションの拠点としてのログハウス作り、谷津田を利用した米作り、そして多くの町民の参加できる里山ボランティアの組織づくり、地域の里山づくりの促進等である。

②里地の体験

里山にある自然資源を循環し、有効利用させるための技術、文化の活力源である白炭窯、ビオトープとしての池三か所、ホダ木置き場、山菜のタラの木・セリ等の畑、隣接する長福寺の寺山の里山作りと連動して落ち葉を集めての堆肥場等も完成した。火を焚く広場などの交流広場では、キノコ汁とたきびを囲んでの懇親会、講演会やコンサート等も年数回実施し、地域の人たち、都市部の人たちやアジアをはじめとする世界の人たちと交流を深めている。

谷津田を再生させての体験広場であるが、この活動は点にすぎない。面として広げて行くためには、炭の環境浄化実験、炭や道具の保管場所としての物置の設置。交流拠点としてのトイレを備えたログハウスづくり、駐車場の設置。地域の人と連携してのホテルの里づくり、谷津田に連動しての溜め池、山林等をビオトープ空間として再生し、魚、鳥、サワガニ、サンショウウオ、ドジョウ、タニシ、トンボ、水棲昆虫の復活再生が課題である。

また、年数回の竹炭焼き体験、キノコの調査・植え付け、鳥、植生調査、自然観察等の自然学校の開設、有機農業や自然エネルギーの活動団体とも連携を今後更に深めていく必要がある。

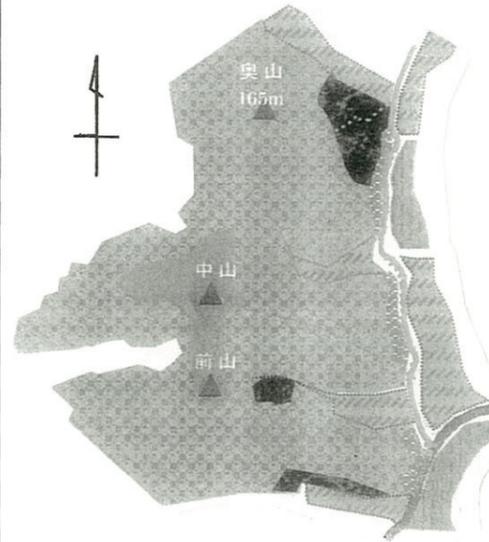
そして会報としての「雑木林」の発行は、私たちの活動を記録し、情報を幅広く収集し、現在かかえている課題の提示や行動の指針、里山ライフの情報発信として機能を発揮できればと考えている。



共に汗を流し里山づくりの

滝ノ沢町有林概念図

魅力を満喫しませんか



角山町有林(7,2ha)は小川町の環境基本計画に基づく里山づくりのモデル地区として、小川町里山クラブ You-You がボランティアで、NPO 風土活用センターが学校林として、里山整備、自然観察、利活用を行っています。

町有林は町民の共有財産です。どなたでも気軽に参加できます。共に汗を流し里山の魅力を満喫しませんか。

当面の整備計画は次のようになっています。

里山作り整備計画

この滝ノ沢町有林はかつて草刈り場、薪炭林として利用されてきた入り会い山で、植物相の豊かな山でしたが、時代の流れの中で利用されず荒れて放置されてきました。里山の魅力を十分発揮できるよう、利用目的や植生に応じた整備計画を立てて活動を進めていきます。

★区分

◆コナラ・ヤマザクラ地区

- ・下刈りで豊かな林床作り
- ・萌芽更新で山の若返り

◆アカマツ地区

- ・ヤマツツジのある松林景観の復

◆スギ造林地区

- ・土壌保全や野鳥の棲家として

◆林縁地区

- ・蔓などによる林内環境の保護

◆散策路・休憩区

- ・散策・観察・憩い語り空間

★作業・調査

下刈り、落ち葉はき

炭焼き、炭材作り

キノコの植菌

昆虫の越冬床作り

松茸林の復活

散策路整備、萌芽更

新動物・鳥類観察

樹木草本の花暦作り

2003年12月例会(12/14) 活動メモより

今日の作業は炭・キノコ用材の伐採・玉切りです。

ここは、「用材の伐採～萌芽更新～育成管理」＝里山の再生循環の実践地区です。
2001、11月伐採区域(NPOふうど)の状況観察・植生調査の報告もあります。

作業内容(10:30~12:00)・(昼食休憩・懇談)(続けられる人は13:30~15:00)

炭・キノコ用とも90cmに玉ギリします。運搬できるものは倍の180cmに切り、小枝も炭焼きの下敷き用～運べる大きさに束ね、道際まで運びます。(体験広場に車で運びます)

安全作業のために

斜面の倒木を切ると、玉ギリした材の転がりや木全休のバランスが変わって動きます。また、枝を切るとき、跳ねたり木全休が動いたりしますので、作業にも仲間にも注意が大切です。声をかけあい、ゆとりを持って。里山を守り、人や虫や鳥を養い生きてきた木々に感謝して

- ①チェーンソー毎に作業班を組み、別々の木を玉ギリします。
- ②チェーンソーで幹の玉ギリと枝打ち(太いものは玉ギリ)をします
- ③玉ギリした材を搬出した後に、小枝の切断と束ねをナタ・ノコで行います
- ④チェーンソーは経験者が行ってください。

作業上の注意事項

- ①木の安定を確認して、足場を確保して作業する。
- ②山側に位置し、元口から梢に切り進む。玉ギリした材の転がりに注意(支え持ち)。
- ③支え枝・弓状枝等反発力のある枝を切るときは、反発力を弱め、木の安定に留意して
- ④ナタ使用時は、刃先方向に足を出さない、刃先や手元が狂う枝等に留意して
- ⑤仲間との安全間隔(枝先や転がり)を常に意識しながら、チェーンソー作業者は特に

伐採地の「萌芽」状況と植生調査(別紙)山田さんより

町が設置する看板(たたき台案)

冬期間の里山作業 みんなで話し合いました

- 散策路の整備;中山～後山～谷津道、第1谷津～前山
- 散策路付近の枯れマツの伐採
- 中山西尾根マツ林の下刈り
- 散策路脇の木の名札付け
- 落ち葉掻き
- 月例会以外の作業日設定について



里山の再生(整備・活用・交流)をめざして

輪湖 昇

わたくし達の里山づくりは、多様な生物の棲む里山の整備、里山資源を循環させる技術・文化の継承、子供や町民が里山に親しみ学び・自然体験ができる交流の場にしてゆくことなど総合的な取り組みをめざしています。

そこで、今回は、「コナラ・ヤマザクラ地区の整備に関して」現状でのいくつかの課題やテーマについて、みんなで考える話題を提供したいと思います。

現状での評価とこれからの取り組み(案)～みんなで考えましょう～

1. 里山整備面から：前山斜面は比較的ゆるく林床も明るい地区で、樹木も多層に育っており、低木層に多様な花木がみられましたので、交流・観察拠点として、林床の草本植生の復活を期待して整備を始めました。03年の作業で林内の見通しと林床照度が改善され、ヤマツツジの開花も増えてきましたが、草本類の再生の兆しが少なく、アズマネザサの新芽の発生や低木層が混み合うなど、つぎの手入れが求められています。
 - 下刈りと落ち葉掻きをした西側との比較をしながら、アズマネザサの除去、低木層の管理・草刈機使用の可否、年間作業量等を考慮した「保全整備作業」の基準をつくってゆく必要があります。
 - 林床植生と林内照度等の調査を行い、低木や高木層の除伐をしたり、土壌改善のために炭の散布、自然植生種の移植の検討もしてみてもどうでしょうか。
 - 枯れ松の除去、スギ・ヒノキ等の除伐をしてゆくとして、草本類の復活と低木植生は競合する面も考えられますので、推移を見ながら東北斜面の整備を進めてゆきたいと思います。
 - 除伐しているヒサカキもヒヨドリやメジロなどの冬の食料であり(雑木林創刊号14頁)、アズマネザサも野菜類の手入れに使う等、これらの植物にも配慮した整備も必要になります。林縁地区の整備も今後の課題です。
2. 里山資源の活用面から：里山を現在に活かすためには、多様な樹種を活かす多面的な活用術を用意して行く必要があります。



滝ノ沢町有林花暦 ～里山に咲く可憐な花たち(秋編)～

森林インストラクター 山田寛和

現状の炭焼き・キノコほだ木・薪利用や落ち葉の農業への利用だけでは、活用樹種が少なく、70種に及ぶ里山現存樹種を活かすには、もっと多様な里山資源の活用術が求められています。

○「里山」は地域の人々の生産と生活に継続的に利用されてきた「場」であることを考えると、わたくし達も、多くの人の日常性ある資源の活用策を考えることが、里山を現在に活かすこととなります。

○各地の事例を見ると、「木工加工」の分野が注目されます。この分野は、いたずら・遊びから、工芸品や日用品まで、深さも広がりも多く、子供から大人まで、多くの人の多様なニーズにこたえられる魅力がありますので、ぜひ実現してゆきたいものです。

○多様な樹木を活用することで、里山の木々の個性を知ることになり、個々の木々に対する愛着が増し、整備や交流に繋がります。

3. 自然体験・交流面から：多くの町民や子供が里山に入って、親しみを持ち、多くのことを感じ、学んでほしい。里山整備はそのための条件整備であり、舞台装置づくりとも言えます。

○田村先生の「里山の植生分布」(創刊号 4, 5 頁)、山田会員の「里山に咲く可憐な花たち」(同 10, 11, 12 頁) 百武副会長の「秋から冬にかけての滝ノ沢町有林の鳥」(同 13, 14 頁) を発見し体験できる好適スポットを考え、知ってゆく必要があります。

○前山地区で、「なにが」「どのように」発見・体験・観察できるか企画してみましよう。教えるのではなく自らの観察・体験で発見して行けるシナリオも考えたらすばらしいですね。

○植生についてみても、里山樹種の移り変わり(アカマツ→コナラ→カシ)、立地条件による植生の違い、縦空間の棲み分け(高木・亜高木・低木)、ヒサカキ等の影響、ヤマツツジの開花条件など。

○里山生態系、光を求めて葉の工夫、子孫を残すための工夫、落ち葉・枯れ木から土へ、雨水の行方、マツ枯れの仕組み・・・など

○五感を使った里山体感ゲーム、木登り、木の上の家、ブランコ、ロープ渡りなどの子供の遊びゾーンも作りたい。

など、整備・活用・交流を一体のものとして、多様かつバランスがとれ継続性のある里山づくり・人づくりを進めてゆきたいと思います。



蝉が大合唱で迎えてくれた里山の盛夏8月。この年が冷夏だったとはいえ、ちょっと歩けば汗だくになる散策の合間、視線を足下に移せばノハラアザミやツリガネニンジン、アキノタムラソウなど、低山の秋を代表する草花があぜ道沿いに咲いていて、季節が移り変わっていることに気づかせてくれます。



オトギリソウ

9月の半ばは、秋の花の種類が一番多い時期で、前記の花のほか、キツネノマゴ、イヌタデなど初冬まで彩りを添えてくれる草花や、オトギリソウやネジバナなど畦のわだちを一時だけ鮮やかにしてくれる草花などで賑わいました。

10月はキクの仲間が目立ちます。一番目立つのが帰化植物セイタカアワダチソウ。街道筋や休耕田を黄色に染めまです。町有林では林道に面した辺りと、内部の谷津にその分布が限られているようですが、これは人の出入りが少ないことによるのかもしれませんが。背が高くその先にまばらな白い花をつけるシラヤマギクは、夏から咲き始めもうそろそろおしまいですが、あぜ道には白いユウガギクや、藤色のカントウヨメナ、ノコンギクなど、いわゆる野菊が小さな群落を作っています。陽当たりの良い土手ではリュウノウギクが、大きめの白い花でその存在をアピールしていました。林縁や明るい林内にはアキノキリンソウが小さな黄色い花を房状につけ、谷津の奥では、キッコウハグマの白く可憐な花が木漏れ陽を受け輝いているのに出会うことができるでしょう。



キッコウハグマ

11月に入り朝晩が冷え込んでくると、いち早く紅葉したヤマザクラがその葉を落とします。そのころになるとさすがに花をつける植物が減ってきますが、ノハラアザミやキツネノマゴ、リュウノウギクなどはまだまだ元気に咲いていました。

コナラが紅葉し斜陽を浴びて橙色に染まる頃、遅咲きのノハラアザミを最後にこの年の花の季節は終わり、里山は冬を迎えました。

滝ノ沢町有林 花暦:平成15年秋

No.	種名	花の色	場所	8月			9月			10月			11月			12月		
				上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下	上	中	下
1	オトコヨ						○	○	○	○	*							
2	ツククサ						○	○	○	○								
3	アオツツラフジ						○	○	○	○								
4	アキノタムラソウ						○	○	○	○	*							
5	キキョウ						○	○	○	○								
6	ナガバノコウヤボウキ						○	○	○	○								
7	ヤマハギ						○	○	○	○		○	○	○	○	*		
8	シラヤマギク						○	○	○	○								
9	ヤマノイモ						○	○	○	○	*							
10	キンミズヒキ						○	○	○	○	○	○	○	○	○	○	*	
11	ノハラアザミ						○	○	○	○	*							
12	ヤブラン						○	○	○	○								
13	ツリガネニンジン						○	○	○	○								
14	アキカラマツ						○	○	○	○								
15	キツネノマゴ						○	○	○	○								
16	イノコヅチ						○	○	○	○	*							
17	ワレモコウ						○	○	○	○								
18	コバギボウシ						○	○	○	○								
19	ゲンノショウコ						○	○	○	○								
20	ヤブハギ						○	○	○	○	*							
21	クズ						○	○	○	○								
22	ヤマジノホトギス						○	○	○	○								
23	オクモミジハグマ						*	*	*	*	○	○	○	○	*			
24	キッコウハグマ						○	○	○	○								
25	トクリマメ						○	○	○	○								
26	キハギ						○	○	○	○		○	○	○	○	○		
27	イヌタデ						○	○	○	○	*							
28	オオバコ						○	○	○	○								
29	ヤブソバ						○	○	○	○								
30	ネジバナ						○	○	○	○								
31	オトギリソウ										*	○	○	○				
32	アメリカセンダングサ										*	○	○	○				
33	ノミノフスマ										*	○	○	○				
34	イボクサ										*	○	○	○	○	*		
35	コウヤボウキ										*	○	○	○	○	*		
36	セイトカアワダチソウ										*	○	○	○	○	*		
37	ハキダメギク										*	○	○	○				
38	ノコンギク										*	○	○	○				
39	ヤマハッカ										*	○	○	○				
40	イヌコウジュ										*	○	○	○				
41	アキノキリンソウ										*	○	○	○				
42	アキノウナギツカミ										*	○	○	○				
43	ユウガギク										*	○	○	○				
44	ノササゲ										*	○	○	○				
45	ポントクタデ										*	○	○	○				
46	ヒメジソ										*	○	○	○				
47	タニソバ										*	○	○	○				
48	リュウノウギク										*	○	○	○				
49	オケラ										*	○	○	○				
50	アキノノゲシ										*	○	○	○				
51	カントウヨメナ										*	○	○	○				
52	オオイヌタデ										*	○	○	○				



ツリガネニンジン



ネジバナ



ゲンノショウコ



ノコンギク

凡例	
場所	林縁明部/道脇
	林縁暗部
	林内
	谷津(湿地)
開花状況	* 蕾、咲き終わり
	○ 開花中
	◎ 開花最盛期

~平成14年 山田のフィールドノートから~

里山クラブの皆さんに出会ったのが昨年4月。それから十月、いつの間にか滝ノ沢の町有林を散策するのが習慣になりました。

山つつじの季節から始まったその散策の主目的は、移り変わる季節毎の花々を見て回ることでしたが、里山の魅力は綺麗な花だけではありません。里山は生き物と山の恵みの宝庫です。

そこで、季節を通した観察記録の中から印象に残っているものをいくつか紹介してみましよう。

これに目を通して興味・関心がわいてきたら...、どうです、この春から里山散策に出かけてみませんか。



4/26 谷津田にてトウキョウサンショウウオの幼生(オタマジャクシ)を見つける。

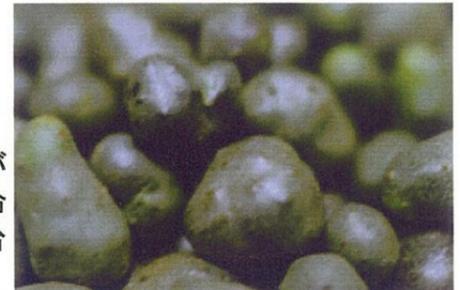
この谷津周辺の自然度はまだまだ高い。

6/** 谷津にてノウサギの幼獣に遭遇。結構近距離で観察することができたがあいにくカメラを持ち合わせず残念。まだのびきらない葎の新芽を食べに来たのか。

7/27 散策路入口にてミヤマクワガタを発見。立派なあごをもったオス。子供の頃から憧れていたもので、いささか興奮気味にシャッターを何度も切る。

9/7 ヤマノイモの“むかご”を初収穫。塩ゆでにして酒の肴に。

9/16 キアシナガバチのコロニーに出逢う。灌木の地面すれすれに巣を作っていた。アシナガバチが高い所に巣を作る年は雨が多いというが、その逆はどうであろう。冷夏で曇りがちだが、降雨は大してなく、台風も今のところ直撃を免れている。



10/7 アケビの果実を初収穫。ヤマノイモの“むかご”も大きくなった。アケビの素朴な甘みが口中に広がる。むかごは夕食でむかご飯に。



10/26 オトコヨウゾメの果実が赤く熟した。他にミヤマガマズミ、アオハダ、ニシキギ、ヤブコウジなど。この山には、赤い実のなる樹木が多い。

11/23 ムラサキシメジを収穫。先客がいたのか、群落をつくるはずだが一株のみの収穫。それでも一回分のみそ汁の具としては十分なほどのサイズだ。

12/2 町有林のコナラが紅葉のピーク。朝の陽光に照らされ、橙色に輝く。

12/20 クリスマス用リースにと、アケビ蔓を採取している男性に出会う。

12/30 神棚に飾るのであろう、ヒサカキを採取している人を見かける。



里山の不思議発見 冬虫夏草

一冬には虫となり、夏には草になる菌界のカー

馬場 信一



10月19日(日) 埼玉菌類研究会の現地調査会に里山クラブとして参加しました。

好天に恵まれ、小川盆地を見わたせる金勝山でのキノコの調査でした。

まず、本日の会の趣旨、日程等の説明の後、グループごとに分かれての調査となりました。今年の夏は、雨が多くキノコの繁殖には好都合かと思いましたが、雨に伴って低温になり菌の繁殖が不十分で、秋のキノコは不作であるということでした。過去5年間の調査データが配られ、子供の頃よく見たキノコと大分変わってきたことを感じさせられました。

松茸、ナメコ、サクラシメジ、イッポン、キクラゲ等の食べられるキノコを期待しながら出発しました。無い無いと言いながら歩き回りながら、前の人の足跡を見ると大きなハタケシメジがあったり、きれいな毒キノコ(名前がわからない)の行列があったりして、子供のようにはしゃぎまわり、気持ちよさを感じました。

楽しいお弁当の後は待望のキノコの鑑定会です。 圧巻です！なんと沢山のキノコが！ また、指導者の方のなんと知識の豊富なことか！話に聞いていた冬虫夏草が3つもあったり、また新種と思われるキノコも発見されました。

残念なのは、子供の頃沢山あったチタケ、ネズミタケ、ホウキタケなどが見つからず、昔のキノコの相と今のキノコの相は大分違ってきているのではという印象を受けました。

また、酸性雨、山の手入れ等色々なことが考えられるのではと思いつつ里山の複雑さ、繊細さを感じさせられました。また、生物界の中の動物・植物のみならず菌類の一重要性を再認識できた会となりました。また里山に対する親近感と関心が高まった一日でした。



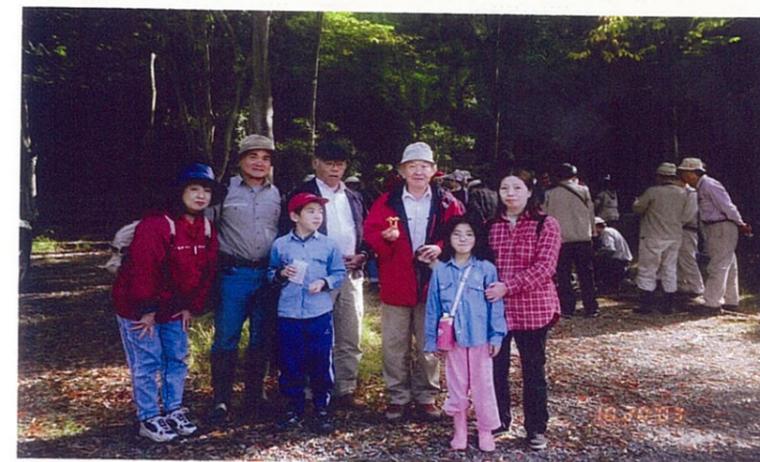
キノコ ゾクゾク 発見

毒キノコだけはごめん

しっかりした鑑定を！



冬虫夏草



和紙の里 小川町の 手すき和紙体験

資源の有効利用と伝統の技・文化の継承を目的として、里山クラブではコウゾ畑の管理、刈り取り、和紙の手漉き体験を慈恩寺のリチャードフレビンさんの工房で実施してみました。



What is the attraction of handmade Washi?
I always answer the question by saying that the finished paper seems to be "alive". That is, if you compare a sheet of traditionally made washi with a sheet also handmade, but using a different raw material such as wood pulp (usually pine wood), you will see clearly many differences. For example, the kozo washi sheet will be harder and crisper, and if you try to tear it, it will be much more difficult to tear than the wood pulp sheet. If you wet the kozo sheet it will expand and when it dries out, it will return to its original size without wrinkles or distortion. Wood pulp is made by chemically and mechanically reducing the entire pine tree into chips and then into pulp using a pressure cooker. Kozo pulp is made by using only the inner white bark of young one year old trees. Kozo bark is not processed using any strong chemicals. Traditionally kozo paper was beaten

by hand. No machinery was used. The result is that the fibers in the traditionally made paper remain long. Each individual fiber in the sheet of paper has not been cut or damaged with strong chemicals or machinery. The fiber length (8~12mm) is the same as it was as bark on the tree. Wood pulp fiber have been shortened and damaged by machinery and chemical processing. There are also non-cellulose impurities remaining in the wood pulp sheet which cause the paper to age quickly. However there are sheets of paper remaining in the Shobo-in store house in Nara that are more than 1000 years old.

Paper function or use is also very important. All paper is good paper if it serves the purpose. Newspaper is useful for only a short time, but a fine drawing, painting, print or manuscript must last for a long time. The difference between commercially made paper and traditionally made hand made paper is similar to the difference between a cheap plywood table and an expensive hard wood table.

When I first started to make paper, my interest was only in wood block printing paper. Over the years I became very attracted to the process of making the paper. Preparation of the bark, the cooking, the washing, the beating and the sheet formation are all very satisfying. Several years ago we began to cultivate kozo trees on land owned by Mr. Akira Sato. With the help of many volunteers, we are able to collect enough kozo bark to last for the entire year.

Papermaking in Ogawamachi has been continuing for more than 1300 years. I think that it is the responsibility of this generation to keep the craft alive or to watch it die out. As an industry it has changed over the years, but there is a lot of enthusiasm by some in the younger generation to make interesting and creative paper. And I hope that they will be supported by consumers who highly value the beauty and quality of fine hand made paper and paper crafts.

Richard Flavin, Feb 18, 2004

ムササビの滑空を見た！！

名古屋 眞

◇ムササビとの出会い

「グルルル、グルルル」と、子犬がねぼけた時のような声が樹上で起こった。とっさに手にした懐中電灯を星空に向けて照らした。枝をけって四肢を体いっぱい大きく広げ、中空に飛び出そうとする瞬間のムササビの姿がライトに照らし出された。10メートルほど離れた木の枝に止まり、大きな両眼はライトに反射してキラキラと輝いている。私はそれ以上の深追いをせず、その場を去った。'03年11月18日午後5時40分。

'03年の7月のある日。家内が朝の犬の散歩から帰るなり、神社の境内の巨木の根元に「リスを大きくしたような、ツメの大きな見たこともない動物が死んでいる」との報に、急いで現場に駆けつけた。体とは釣り合いなほど大きなかぎ爪を持った、子猫ほどの大きさをしたこげ茶色のガッチリとした体格の物体。私とムササビの初めての出会いだった。

以前にも神社に隣接するお宅の屋根裏に物音がするので害虫駆除用の薫蒸処理をしたところ、ムササビの死体があったという話をきいたことがあった。それらのことを鳥類研究家の百武 充氏に話したところ、ムササビが独特の鳴き声を発することを教えていただいた。そのことがムササビとの出会いにつながったわけである。なお、前述のムササビとはその後何度か同じ神社でお目にかかっている。

◇人生観が変わってしまった

生まれてから40年間住みなれた荻窪から小川町に越してきたのが平成元年。「コンクリートジャングルになればなるほど進歩であり、善である」という私のそれまでの見方や考え方が徐々にはがされていった。早朝の愛犬との散歩では、何度もキツネを見かけたし、キツツキ、カワセミ、キジ、タヌキは散歩コースの常連。いま、キツネと出会うことは全くなくなってしまった。

私はもう六本木ヒルズや新丸ビル、銀座や新宿の高層ビルから眺める夜景など何の興味もない。緑の森がありきれいに整えられた芝や池のあるゴルフ場が、これを維持するために大量の農薬をまわりの自然にたれ流していることも知ってしまった。

声高に野生を守れ、自然環境を大切にと叫ぶつもりはない。ただ一つ。これら野に生きる隣人たちが必死に生き延びようとしている姿を遠くから見守り、邪魔をしない、ちょっとした心配りと優しさがあればと願っている。



和紙の心と対話する



和紙が出来るまで



①楮煮



②楮さらし



③楮打



④紙漉



⑤紙しぼり



⑥紙干



⑦紙そろい

歴史

■小川和紙の起源 日本紙の起源は、推古天皇十八年（六一〇年）高麗の僧、曇徴が来朝した際に製紙技術を伝えたといわれています。奈良正倉院に伝えられる古文書には、八世紀に武蔵国から大量の紙を寄進したことが記されていて、埼玉ではその当時から紙漉きが盛んであったことがわかっています。小川和紙の始まりは、中古武蔵国に帰化した高麗人によって武蔵紙が広められ、小川町付近に移住した高麗人たちが、手漉きの技術をもたらしたといわれています。都幾川村の慈光寺をはじめ、近隣の多くの寺で写経用和紙として使われていた小川和紙。その当時の僧侶が手にした和紙は貴重なものだったに違いありません。

■「ピッカリ千両」江戸時代の小川和紙 天正十八年、徳川家康が入府し、文化の中心は江戸に移ります。この頃、紙の需要が急激に増えはじめ、小川町は男衾、比企、秩父の武州三郡、漉家七五〇戸を擁する一大和紙製造の中心として、江戸で手広く商っていました。今でも、紙干しが好天気にも恵まれると「ピッカリ千両」といわれ、その当時の盛況ぶりをうかがい知ることができます。

■明治、大正、昭和、そして平成 漉家の数は、明治二十七年には一〇七〇戸、大正時代は五七〇〜五八〇戸。昭和に入り、第二次大戦による軍需用（気球紙、砲弾火薬包装紙など）の需要増加によって、飛躍的な進展を遂げたにもかかわらず、辛い思い出が残る時代でもありました。そして今、漉家は十八戸だけ。小川和紙の歴史と伝統を継承してくれる若い人たちに望みを託します。

小川町史より

新春里山探訪・仙元山冬鳥観察



加治 道子

小川町の生まれではありませんが仙元山の名前は子供の頃から知っていました。比企郷土カルタというのがあって **せ** は「仙元山でカッコウが鳴くよ」というのだったからです。

集合地の伝統工芸会館を出て歩き出すと、スズメ、ムクドリ、ツグミ、モズ。槻川にはキセキレイ、ハクセキレイ、セグロセキレイなどがみられました。柳橋の手前を河原に降りると、流れの中に昔ながらの細い板の橋があり、久しぶりにどきどきしながら渡りました。神社の先から細い山道にはいると、両側の畑にイノシシよけのブリキの囲いがありビックリしました。雑木林はではメジロ、エナガ、シジュウカラ、コゲラ、などが枝から枝へと飛び交っていました。前夜の雪が少し残っていた見晴台近くの日陰の林では、数羽のヤマガラが見られ嬉しくなりました。

遠く浅間山などを見ながら、日だまりで昼食をとりました。ゆっくりと休んだ後、仙元山山頂、青山城（割谷城）跡を経て南東側へ下りました。道沿いのうす暗い沢にルリビタキ、シロハラなどがいました。ゆっくりと戻ってくると、柳橋の下流に青緑色のカワセミの姿が見られました。

雑木林の梢の向こうに透ける冬の青空を見ながら落ち葉道を歩き、日常から離れた心安らぐ一日でした。



カワセミ

この「町有林」では、「里山づくり」のモデルケースとして、

町民のみなさんによる「雑木林の整備等」が実践されています。

- **土地表示** 小川町大字角山字滝ノ沢1505番地、937番地
- **地目面積** 山林 72,488㎡
- **概要** 小川町の美しい自然は、ここで生活する人々との共生という文化に支えられ維持されてきた背景をもちます。ところが時代の流れとともに、人々の暮らしから自然が離れていくと、人の手の入らなくなった自然は荒廃が進み、結果として良好な環境を維持することが難しくなっています。

しかし、今日、町民みなさんの環境に対する意識の高まりとともに、「自然との共生」が大切な視点として再認識され始め、環境基本計画においても重要な理念のひとつとして位置付けられました。

現在、この町有林では、「里山づくり」のモデルケースとして、雑木林の整備と自然学習等が、町民グループの自主的な取り組みとして実践されています。町有林は町民の共有財産です。関心をお持ちの方は、お気軽に参加してみてください。

■ **取り組みを進める町民グループのみなさん**

ボランティア団体

小川町里山クラブ 'You-You'

NPO 風土活用センター

現況植生概念図

滝ノ沢町有林概念図



凡例

コナラ・ヤマザクラ地区	谷津田
アカマツ地区	湿地
スギ地区	林道高谷・角山線
林縁地区	町道
緩傾斜地	歩道

掲示板

- ゴミの不法投棄は犯罪です。「不法投棄絶対禁止!!!」
- この町有林を使用される方々も、**ごみは必ず持ち帰りましょう。**雑木林の清潔の保持にご協力ください。
- この雑木林に息づく植物は、みんなで守り育てていくべき財産です。大切にしましょう。

看板設置者 小川町

問い合わせ先 小川町役場 環境衛生課

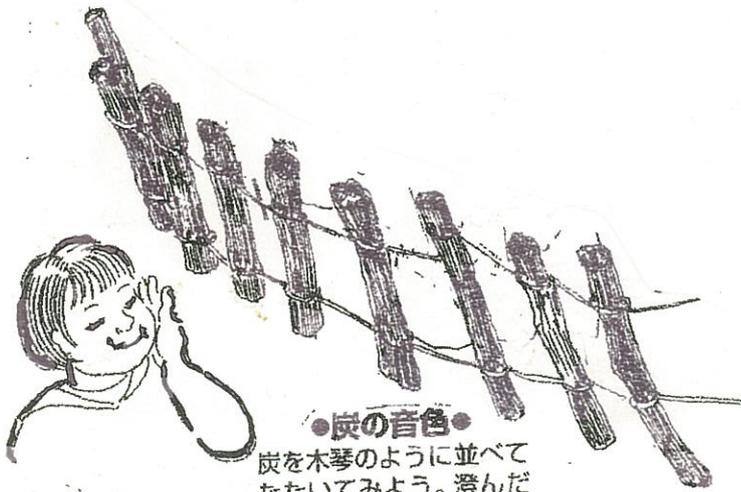
TEL 72-1221

里山クラブ活動報告

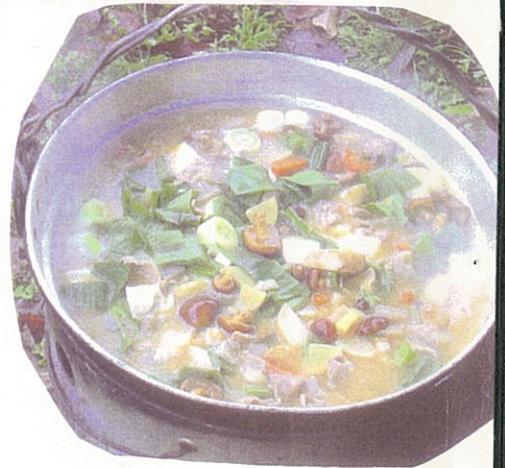
(2003年 9月 ~ 2004年 2月)

- 9月28日(日) 間伐材の搬出(野外ステージ用檜材、小川町古寺)
- 10月19日(日) 金勝山キノコ現地観察会(小川町元気プラザ=旧少年
自然の家、埼玉菌類研究会主催)
冬虫夏草、新種の可能性のあるキノコの採集
- 11月16日(日) 里山(町有林)の散策路作り(滝ノ沢町有林)
野外ステージ用檜材の皮むき・収穫祭(採りたての
ナメコでの熱いナメコ汁、飯田里山体験広場)
- 12月14日(日) 炭材用の材の伐採、たま切り(滝ノ沢町有林)
- 1月11日(日) 楮の刈り取り(飯田の栽培楮)
和紙工房(R・フレビンさん宅)までの運搬、話し合い
- 1月18日(日) 新春里山探訪(仙元山、青山城跡)
冬鳥の観察(講師:加治道子さん、百武充さん)
- 2月14日(土) 和紙漉き体験(場 所:小川町、Rフレビンさんの
和紙工房、指導者:R・フレビンさん)
- 2月15日(日) 白炭窯の炭材詰め、竹の鑑賞炭用の加工
3月例会のキノコの植え付けようのホダ木の仕分け
(飯田里山体験広場)





●炭の音色●
炭を木琴のように並べて
たたいてみよう。澄んだ
きれいな音がする。



小川町里山クラブ

“You You”

雑木林編集部連絡先：〒355-0324

馬場 信一 (TEL)